

研究主題 **Beyond “Wayaku”**
the Top-down Approach to Reading Comprehension
～「和訳」を超えた読解指導：トップダウン式読解ストラテジーの試み～

要約：これまで主流の教授法だった「和訳」だけでは「読解」に至らない理由を明らかにし、読みの苦手な生徒の読解力を養成する方法を探ることが、本研究の目的である。英語が得意な生徒はトップダウン式に、苦手な生徒はボトムアップ式に読み、和訳により依存していることがわかった。そこで、トップダウン式読み方に焦点を当てた授業を行ったところ、読みが苦手な生徒もトップダウン式読み方をするようになったが、4分の1の生徒が和訳に依存しているという結果が得られた。和訳から脱却するには抜本的改革が必要であるとの認識を得たが、教師が「英語を読む」とはどういうことかを教え、「読み方」だけでなく「読み方の使い方」を教えることにより、生徒が自身の英文の読みに関するメタ認知を向上させ、「読解」に至るための「読み方」するようになるということが明らかになった。

キーワード：和訳、読解ストラテジー、トップダウン式読み、スキーマ理論、メタ認知、

I はじめに

英語教師であれば一度は耳にしたことがある「(英語を)訳せるけど何が書いてあるのかわからない。」という生徒の言葉から、批判の多い「文法訳読式授業」が依然として行われ、生徒たちは「英語を理解していない」という2つの問題点が考えられる。まず、英語の読みが得意な生徒(good reader)の英語の読み方と読みが苦手な生徒(poor reader)の読み方を比較した。good reader は全体把握から詳細理解へとすすむトップダウン式に読み、poor reader は和訳に依存する割合が高く、詳細にこだわり、全体把握まで至っていないことが分かった。そこで、本研究では、読むとはどういうことか、またそのプロセスを明らかにし、そのプロセスにおける和訳の位置づけをする。また poor reader に good reader の読み方を教えることによって、彼らの読解力が向上するという仮説を立て、生徒のメタ認知を意識しながら、good reader が

主に用いるトップダウン式読解ストラテジーに焦点をあてた授業実践をおこなった。

II 理論的背景

1. 「読む」とは

「読む」とは以下の特徴を持つ。

- ①読み手は目的を持って読む。
- ②【書き手・読み手間】【読み手・テキスト間】【言語処理・認知処理間】【新情報・既有知識間】に相互作用がある。
- ③心的表象形成。

つまり「読む」とは受動的行為ではなく、読み手が comprehension(「理解する」という目的を持って、相互作用をしながら行うものであると定義づけられる。

2. 読みのプロセス

【step 1:文字認識】 【step 2:言語的処理】
⇒【表層レベル】の理解

【step 3:相互作用】 【step 4:心的表象の形成】

⇒ 【comprehension レベル】

心的表象を形成できなかった場合には様々な方策を駆使して理解しようとする。この方策が読解ストラテジーと呼ばれるものである。

3. 読解ストラテジー

読み手が読解に至るために、読み手が頭の中で意識的に使用する方略を読解ストラテジーといい、トップダウン式とトムアップ式に大別できる。前者では、読み手はスキーマと呼ばれる概念を喚起し、文章が意味するところに予測を立て、スキーマの下位層を選択し、予測が適合するか判断しながら読み進めていくとされる。また後者では読み手は単語1つと言った具体的な入力情報に基づいて、句、文、段落の意味理解へ進みテキスト全体を把握するとされる。よい読み手はトップダウン式に読み、そうでない読み手はトムアップ式に読む傾向にある。ただし、どのストラテジーも効果はあるため、読解ストラテジーを教えるだけでは不十分で、それを効果的に使いこなすメタ認知と呼ばれる力を涵養させることが必要である。

3. 和訳

本研究では「和訳」とは英語を一語一語機械的に日本語に置き換えることとする。「翻訳」との違いは「解釈」が入らない点である。

(1)和訳の利点

【教師】 準備が容易、威厳を保つ、授業目的の明確化、答えが一つという伝統的教育と合致
【生徒】 学習すべきことがわかる、母語使用の結果「わかった『つもり』」になる、安心する。

(2)「和訳」の問題点

- ・「和訳」＝「理解」、読む目的＝「和訳」という誤解がある。
- ・表層レベルの理解でとどまり心的表象が形成されない。つまり comprehension に至らない。

(3)メンタル訳

以下の特徴を持つ訳の一つである。

- ①情報を得るため、情報を統合するために母語を使用するもの。
- ②読み手の「解釈」が入る

③言語形式より命題を重視。

母語を使用するため認知的負担が軽く、認知資源を、言語処理を超えた情報の統合などのような高次処理に使用することができると考えられるため、授業では使用していくこととした。

III 仮説

生徒たちが英語を実際にどのように読んでいるのかをアンケート調査を行ったところ、先行研究と同じく good reader はトップダウン式に読み、poor reader はトムアップ式に読んでいることがわかった。その一方で効果的に英語を読むために必要な要素に関しては両者に大きな差はなかった。また「英語を読む」とは「和訳」することであると考える生徒は全体で 75%、poor reader では 86%を占めた。そこで、poor reader に good reader の用いている読み方を教えることによって読解力が向上すると言う仮説を立て、以下の2点に焦点を当てた授業実践を行った。

①和訳を使用しないこと

②全体把握をするための読解ストラテジーを教えること。

IV 授業実践

(1)実践 ① (1学期・夏季休業中)

【英語Ⅱ】

和訳に代わる教授法を実践すれば和訳から脱却できると考えた。3. (1)で挙げた和訳の各利点の代替え教授法は下記の表にまとめられる。

和訳の利点	解決策
学習内容が明確	*ワークシート作成
授業目的＝和訳	授業目的＝読解 生徒の意識改革
「わかったつもり」	「和訳」を超えた真の理解へと生徒の意識改革
和訳がないと不安	内容確認発問 要約 メンタル訳使用

(表1)

*ワークシートの項目

- ・背景知識を活性化させる質問
- ・英語による T/F 質問、内容に関する質問
- ・空欄補充による日本語要約
- ・英英辞書からの定義

- ・ 文法説明
- ・ 推論を必要とする発問

[リーディング]

主要文と詳細文を区別するストラテジー教授。その後、要約作成。ベストサマリーを選定し、選定理由などを書いて教室掲示。

[夏季補習]

テキスト構造タイプを教え、それに合わせた読み方の指導を行った。

(2)中間報告

4 か月間の実践後生徒に意見を聞いた。下の表はそれぞれの項目について効果的であると答えた生徒の割合である。(表2)

項目	%
英文要約	80.4
T/F	88.9
Questions	83.9
日本語要約	94.6
英英辞典	76.3
Hints	77.0
More Questions	72.1
Summary	81.3

それぞれの項目は肯定的に捉えられているものの和訳に関する自由記述が多くあったため再度和訳に関するアンケートを行った。

[結果]

①授業で和訳が必要とする生徒は 30% 英語熟達度によって理由の違いが見られた。

good reader : 自分の訳を確かめたい

poor reader:和訳がないとわからない

②英文を読む際に使用する訳 (表3)

	good reader	poor reader
和訳	13%	55%
メンタル訳	70%	45%
直読直解	17%	0%

(3)実践 ② 2 学期

中間報告から依然として和訳の影響が大きいことがわかったため、和訳は真の読解ではないと生徒に気付かせる実験を行った。

①和訳の限界に気付く実験

[方法]生徒をABCの3グループに分ける。ABは同じあいまいな英文、裏面はAには完全和訳、Bにはタイトルが書かれている。Cには抽象表現を具体的表現に書き変えた英文が書かれており、裏面は白紙である。生徒は英文を読んだ後覚えている内容を書きだし、その命題数を数えた。(表4)

	クラス A	クラス B
A	6.7	3.9
B	8.6	4.0
C	9.4	5.1

*クラスAの方がクラスBより英語のテストの平均点が高い

[英文ABC比較]

産出命題数：英文A < B < C

「和訳」は「理解」ではないと言える。

[クラス間比較]

クラスAでは英文A、C間の差が2.7点、クラスBでは1.2点。英語熟達度が低いと「理解」に必要な認知処理が行われないという、先行研究と一致する結果を得られた。

生徒たちには英文比較の結果のみフィードバックし、和訳は真の読解とは言えないと伝えた。

②英語IIにおける授業改善

主な修正は以下のとおりである。

- ア. 段落読みを意識したワークシート作成
- イ. 授業中、次の学習範囲の英文を初見で読む
- ウ. 協同学習の導入

③リーディングにおける授業改善

- ア. 段落読みのタイミング変更
 レッスン導入時から各パート学習時に変更
- イ. ワークシートに文法説明追加
- ウ. 和訳する英文を事前に指定

V結果

(1)要約

各定期考査、要約問題の得点比較。初見の英文の要約、配点は10点。(表5)

	5月	7月
クラス全体	5.9	6.0
poor readers	3.6	5.2

(2)メタ認知

*good は good reader、poor は poor reader を指す。(表 6)

自分は次の読み方ができる。(%)	4月		10月	
	good	poor	poor	good
①次に何が来るのか予想しながら読む	60.0	10.2	35.7	61.4
②主要部分と詳細部分との違いを認識して読む	73.3	20.0	57.1	61.9
③文章中にすでにある情報と、次に来る情報とを関連づけて読む。	70.0	23.3	64.3	79.5
④文章中に書かれていることが真実なのか、大切なことか問いながら読む	30.0	16.7	50.0	44.8
⑤読んでいる文の内容を理解するために、自分の知識や経験を利用する。	62.4	30.0	71.4	69.5
⑥読んでいる内容を理解の有無を認識しながら読む。	76.4	36.7	57.1	79.3

効果的に読むために気をつけていること(%)	4月		10月	
	good	poor	poor	good
⑦文章の構成	69.3	24.5	50.0	32.1
⑧文章全体の意味を把握	86.4	30.0	71.4	85.7
⑨書かれている話題と既有知識を結びつける	37.9	20.0	64.3	57.1
⑩単語を心の中で発音しながら読む	55.7	40.0	78.6	78.6
⑪各単語の意味を理解する	68.8	50.0	50.0	67.9
⑫文法的構造	61.9	36.7	64.3	71.4
⑬単語を辞書で引くこと	68.6	53.3	57.1	46.4
⑭内容の詳細部分	61.9	53.3	50.0	59.3

(表 7)

(3)自分の英文の読み方 (poor readers)

単位(%)	7月	10月
和訳	54.5	11.1
メンタル訳	45.5	55.6
直読直解	0.0	33.3

(表8)

(4)「英文を読む」＝「和訳」と考える生徒

単位(%)	4月	12月
good reader	60.0	6.7
poor reader	86.2	31.0
全体	75.0	21.1

(表9)

VI考察

(1)要約について

poor reader の得点の伸びが大きかったことから、彼らには特に指導の効果はあったと言え

る。英文を要約するためには、大意把握、主要部分と詳細部分の区別といったトップダウン式に読まなければいけない。poor reader はそのようなストラテジーについての知識がなく、使用できなかったが、指導の結果、使用できるようになったと考えられる。

(2)メタ認知について

表 5, 6, 7 からトップダウン式読みの指導は効果があったと言える。表 6 の項目はいずれもトップダウン式ストラテジーであるが、どの項目も増加している。⑥が大幅に伸びたのは、リーディングでの要約の指導の成果だと言える。①が 3 倍になったのは、ディスコースマーカールについての指導を繰り返し行ったためであると考えられる。④は批評読みに関する項目であるが、上級レベルの読みであると判断したため、指導は行わなかったことが増加していた原因であろう。表 7 の⑦⑧⑨はトップダウン式、⑩～⑮まではボトムアップ式ストラテジーに分類される。⑦⑧⑨が大きく伸びたのは、指導の結果、生徒たちはそれらストラテジーを使用するようになったためであろう。⑩が大きく伸びたのは、音読指導の効果であろう。未知語を推測するように指導したため⑬が減少したと考えられる。4月時点では 86% の poor reader が英文を読むことは和訳と考えていたが和訳して英文を読む生徒は 10% にまで減少したことが、表 8 からわかるが、これは和訳脱却への大きな一歩であると言える。それでも表 9 から、いまだ 2 割の生徒が「英文を読む」＝「和訳」と考えているということがわかった。

VII結論

トップダウン式読解ストラテジーの指導の効果はあったものの、和訳の影響は大きく、和訳からの脱却には入試改革など抜本的改革が必要である。しかし、教師が「理解するために読む」ということを教え、そのために必要なストラテジーのみならず、使い方を教えることにより、生徒が「読んでわかる」を体験することが「自律した学習者」「生涯にわたる学習者」につながるのではないだろうか。

